

## 1. 研究の目的

Beagle によれば、1980年代半ば以降に登場したとされるインフォメーション・コモンズ（以下 IC）は、1995年頃までに米国の図書館で先駆的な取り組みとして広まった<sup>1)</sup>。その後急速に発展し、2004年の米国研究図書館協会 (Associations of Research Libraries: ARL) による調査<sup>2)</sup>では、ARL参加館の約30%が自館にICを設置していると回答している。この際のARL調査では、設置時期、面積、設備、サービス内容、人員の配置など、かなり詳細な項目について尋ねており、2000年代前半までにおける米国のICの実態が報告されている。

本稿では、ARL調査から7年が経過した2011年現在の米国におけるICおよびラーニング・コモンズ（以下 LC）の設置状況やサービス内容を調査し、現在の状況を明らかにすることを目的としている。

同時に、発表者が2011年3月に実施した国内の大学図書館におけるLCの設置状況に関する実態調査<sup>3)</sup>の結果を元に、米国の現況と国内の実態との比較を行う。

## 2. 調査方法

### 2-1 調査対象

調査対象はARL参加機関126機関（2011年7月現在）とした。ただし、大学・大学図書館以外の参加機関11機関を除いたため、最終的な調査対象館は115機関となった。

### 2-2 調査方法

調査方法はWeb調査とした。調査期間は2011年7月～9月にかけてである。ARLのmember librariesのページから各機関のホームページにアクセスし、ICまたはLCの有無、ある場合にはその設備・サービス内容を調査した。IC・LCの有無については、具体的には以下の通り調査した。

1. サービス内容ページを確認
2. ページ内検索を利用
3. フロアマップを確認
4. Newsやお知らせページを確認

IC・LC「あり」との判断は以下の基準による。

1. IC, LC, またはその類義語と思われる名称がページ内のいずれかにみられるもの。
2. 図書館内に設置されているもの。あるいは図書館外設置であっても、図書館が運営になんらかの形でかかわっていることがわかるもの。
3. PCなどのIT設備と、図書館の学習支援サービスとの統合を目的とする設備であることがわかるもの。

以上の基準に該当するものをLC導入済と判断した。

## 3. 調査結果

### 3-1 IC, LCの導入状況

ARL参加機関は比較的大規模な大学が多いため、複数の図書館を持っている場合がほとんどであった。そこで本調査では、1機関が管理する複数の図書館において、い

いずれか1館でもICまたはLCを設置している場合には「導入済」とし、また2館以上設置が認められる場合にも導入済機関数は「1件」としてカウントすることとした。なお、先に挙げたARLによる2004年の現状調査においても、対象機関数123件として調査結果がまとめられているため、本調査と同様の基準によりカウントされていると考えられる。

その結果、対象機関115機関の中でICまたはLCの導入済機関は65機関(56.5%)となり、2004年当時の「約30%」という数値に比べてかなり増加していることがわかった。

また日本の状況と比較すると、2011年3月の時点で35.4%という導入率であった。日本でもかなり普及しつつあるLCであるが、米国の方が先行している分導入率が高い結果となった。

### 3-2 名称

米国においてIC、LCの名称にどのような語が多く用いられているかを見た。①Learning Commons(前後に他の単語を含むものを含む)25機関(38.5%)、②Information Commons(Info Commonsなどの類似形を含む)20機関(30.8%)、③その他20機関(30.8%)となり、Learning Commonsの名称がもっとも多かったものの、Information Commonsまたはそれ以外の名称もほぼ同程度用いられていた。

発表者が2011年3月に実施した国内におけるIC・LCの実態調査では、IC・LCなどの名称を用いている館は135館中33館(24.4%)で、それ以外の名称を用いている館が76.6%に上っていた。日本においても「ラーニング・コモンズ」の名称は図書館員の中では一般化しつつあると考えら

れるが、導入の際にはオリジナル名称をつける館(17館/12.6%)や、場所の機能がわかるような名称(コンピュータ・ルーム、グループ学習エリアなど)を採用する館(53館/39.3%)が多かった。推測になるが、図書館員以外の関係者、つまり大学執行部、教員、学生などには「ラーニング・コモンズ」の名称は一般的ではないと考えられるので、もっと馴染みやすくだのような場所かがわかりやすい名称を採用する傾向が日米ともにあるのかもしれない。

### 3-3 場所

本調査において、LCが設置された場所が特定できたのは50機関であったが、その中で図書館以外の場所に設置されていることがわかったのは1機関のみであった。ほとんどの場合、LCは図書館内に設置されていた。

LCが図書館内に設置されていた49機関中、どのフロアにあるかを特定できたのは27機関であった。内訳は第1表のとおりである。

第1表 LCの設置フロア

階数	館数	比率
1F	15	55.6%
2F	10	37.0%
Main	3	11.1%
低層階	2	7.4%
その他	3	11.1%

(N=27)

各館の構成を詳しく見なければ断言できないものの、ほとんどの館において、LCは図書館のエントランスに近いエリアに設置されているのではないかと考えられる。この結果は国内の調査結果と同様の傾向を示している。つまりLCは日米共通して、図書館のメインとなる場所、利用しやすい場所を選んで設置される傾向があるといえ

る。

### 3-4 設備とサービス

本調査では各機関の Web ページの情報を収集しており、設備やサービスについての記載状況は機関によってまちまちである。できるだけ統一をはかったが、推測を加える必要のある場合もあった。結果、多く導入されていた設備・サービスは第2表の通りである。

第2表 LCの設備とサービス(米国)

設備・サービス	設置数	比率
PC	46	70.8%
コンピュータ・ヘルプデスク	30	46.2%
グループ学習室	28	43.1%
プリンター	25	38.5%
スキャナー	19	29.2%
無線LAN	15	23.1%
プレゼンテーション・エリア	11	16.9%
ライティング・アシスタント	11	16.9%
レファレンス・デスク	11	16.9%
ノートPCの貸出	10	15.4%
カフェ	10	15.4%
サービス・デスク	10	15.4%
ホワイト・ボード	7	10.8%
ピア・サポート	5	7.7%
ラーニング・サポート	5	7.7%
展示エリア	4	6.2%
レファレンス・ブック	3	4.6%
コピー機	3	4.6%
教室	3	4.6%
アカデミックサポート	3	4.6%
リサーチ・ヘルプ	3	4.6%
プロジェクター	2	3.1%
マルチメディア・スタジオ	2	3.1%
自動販売機	2	3.1%
デジタルビデオカメラ	2	3.1%
デジタルカメラ	2	3.1%
コンサルティング・ルーム	2	3.1%
コンセント	2	3.1%

(N=65)

上述の2004年のARL調査の際には、①プリンター、②PC、③コンピュータ・ヘルプデスクおよびスキャナー(同数)の順で多く、これらは今回の調査でも同様に上位に存在している。2004年の調査結果では見られなかった設備・サービスで本調査で上位に来たものとしては、「無線LAN」、「ブ

レゼンテーション・エリア」、「ホワイト・ボード」などがあげられる。

第3表は国内の調査結果である。設備・サービスの内容に米国と大きな差異はないが、米国の調査においては「PC」が最も多かったのに対し、国内の調査では「グループ学習室」が最多であり、それと関連するように「ホワイトボード」が2番目に多い設備となっている。また米国において上位に来ている「スキャナ」や「無線LAN」は国内では導入が進んでいないなど、IT周辺設備の充実度が米国に比して劣っていることがわかる。米国においては、LCは「IT設備と学習支援の融合」という側面が強いのにに対し、国内では、「グループワークなどの要望に応える設備」という意識の方が強く表れているのかもしれない。

第3表 LCの設備とサービス(日本)

設備・サービス	回答数	比率
グループ学習室	90	66.7%
ホワイトボード	75	55.6%
レファレンス・サービス	67	49.6%
個人用PC	64	47.4%
プリンタ	58	43.0%
ラウンジ	44	32.6%
ソファ	43	31.9%
AV機器	42	31.1%
貸出用ノートPC	41	30.4%
プロジェクタ	39	28.9%
教員の授業サポート	33	24.4%
IT技術支援	31	22.3%
少人数グループ用PC	27	20.0%
印刷体レファレンスブック	18	13.3%
ライティング・サポート	15	11.1%
スキャナ	14	10.4%
カフェ	10	7.4%
就職相談	6	4.4%
未定	4	3.0%
ビデオカメラ	2	1.4%

(N=135)

### 3-5 LCの多様性

本調査においては、Web上で紹介されているLCの設備・サービス内容をできる限り網羅的に収集したが、1機関でのみしか見られなかった設備・サービスが20以上

あった。これは対象機関数が 66 機関とあまり多くないことも関係していると思われるが、国内の調査では見られなかった特徴である。一例を挙げると、「デジタルボイスレコーダー」、「大学院生用ラウンジ」、「FAX」「ゲーム機器」などがあつた。国内においてはまだ LC は新しいサービスであり、米国や先行導入館をモデルに試行錯誤しているところが大きい。これに対し、すでにかなり普及が進んでいる米国においては、各機関個別のニーズや状況に合わせたサービス内容の精査が進み、多様化が進んでいることの表れではないかと考えられる。

#### 4 まとめ

以上の通り、Web 調査をもとに、2011 年現在の米国の LC の現状とその特徴をまとめた。1980 年代半ばの登場から 25 年あまりが経過し、LC は順調に普及をつづけ、米国ではかなり一般的なサービスとなっていた。急速に広まりだした 2000 年代半ばと比べても、増加し続けているといえる。そのほとんどは図書館内に設置されていた。設置場所はエントランスやメインフロアに近い場所が多く、利用しやすい場所を選んで設置されていた。これは LC が図書館サービスの中でも中心的なものと認識されていることの表れと言える。名称としては「Learning commons」または「Information Commons」が一般的ではあるが、それ以外の名称も多く採用されていた。

これらの特徴は、現在の日本の特徴にも類似しており、日本も今後同様の発展過程をたどることが予測される。

設備やサービスに関しても、全体として大きな違いは見られなかった。しかし米国においては「IT と図書館サービスの融合」

が重視されている一方、日本では「グループワークを中心とした新しい学習スペース」としての認識が強く、PC 周辺設備の導入は米国に比するとやや遅れているという結果であつた。

LC を先行して導入してきた米国においては、普及は順調に進んでおり、今後も増加していくと見込まれる。また、サービスは画一的なものから、各機関の事情やニーズに合わせたものへと進展していつている様子がうかがえた。上述の通り、日米ではやや LC に対する認識に違いがあるのではないかと推測される。国内においても米国同様に普及が進めば、やがては個別館のニーズによりさらに特色が現れ、米国とはもつとはっきりとした違いが見られるようになるのかもしれない。

#### 注

- 1 Beagle, Donald Robert. The Learning Commons in historical context. 名古屋大学附属図書館研究年報. 2008, vol.7, p. 15-24.
- 2 Haas, Leslie and Robertson, Jan. *The information commons*. Washington, D.C. Association of Research Libraries, Office of Leadership and Management Services, 2004, p.142.
- 3 立石垂紀子.日本の大学図書館におけるラーニング・コモンズの実態と傾向. 2011 年日本図書館情報学会春季研究集会発表要綱.2010.